映画音楽の誕生と変遷 -マックス・スタイナーと西洋藝術音楽の大衆化を中心に-

尾 鼻 崇

映画芸術を音楽面からアプローチする研究は、これまでほとんど行われてこなかった。たとえば、映像学の分野では音楽学的アプローチを行える研究者の不在が挙げられ、また音楽学の分野では、映画が誕生して以来根強く残っている「音は映像の従者に過ぎない」という考え方が研究を滞らせてきた理由として挙げられよう。そこで本論文では、古典的ハリウッド映画の音楽の基礎を築き、「映画音楽の父」と呼ばれる作曲家マックス・スタイナー（Max Steiner 1888-1971）をとりあげ、彼の作風の確立と変遷を考察した。

本論でとりあげるマックス・スタイナーは、後期ロマン主義の大作曲家であるグスタフ・マーラー（1860-1911）に本格的な西洋藝術音楽の教育を受け、当時台頭しつつあった大衆藝術ハリウッド映画の音楽に持ち込んだ重要な作曲家の一人である。

そのようなスタイナーの映画音楽作曲法の特徴として、次の二点を挙げることが可能である。第一の特徴は、後期ロマン主義藝術音楽の代表的手法でもある巨大なオーケストラを用いた壮大なオーケストレーションである。第二には、リヒャルト・ヴァーグナー（1813-1883）が自身の「楽劇」で用いていた「ライトモティーフ」の技法を映画音楽に使用した点が挙げられる。

以上の映画音楽作曲技法は、「標題音楽」およびオペラ、楽劇等で用いられた作曲手法である。そこで本論では、まずこれらの技法の細密な検討を行い、その考察をもとにマックス・スタイナーの代表作である『キングコング King Kong』（1933）、『男の敵 The Informer』（1935）、『風とともに去りぬ Gone with the Wind』（1939）の音楽分析を行った。本論の映画音楽分析は、①.スタイナーが用いた西洋藝術音楽の技法②.スタイナーの作風の確立と変遷③.映画音楽と西洋藝術音楽の相違の三点を中心に行った。以上の考察をもって、スタイナーの映画音楽手法の変遷と、彼の手による西洋藝術音楽が映画音楽へと取り込まれていく過程の一端を明らかにした。

マックス・スタイナーが映画に本格的に携わり始めたこの1930年代は、ハリウッド映画音楽の音楽様式が確立した時代である。そしてスタイナーの手法はジョン・ウィリアムズ（1932-）らに受け継がれ、現代のハリウッド映画をはじめとする多様なメディアで普及している。本研究は映画音楽研究と拡大する映像音楽の分野の繋がりを検討する上でも有意義な結果が導き出せると思われる。